貝盡浦の錦　中

特7
74

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74

ガラス使用

貝盡浦の錦

中

特 7 3 74

128 8. 4

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74

ガラス使用

特7-74

要介

無對類　扇の要相ひる介ゆゑ色赤き小介を稱す介

扇守

螺類　大てふのごとく殼ゑこ白き出てなる介をいとのけ

似て紅

興歌

無對類　あいだ介の形ゆゑ外ゑ色なり小介をうちに

内も紅色なれども外よりあらはし竹ゆゑ出る

系櫛

蚌類　櫛介の形乃やうゆゑふし色まろ黑く多くい白く

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』　請求記号 特7-74
ガラス使用

きげてあうよりうぬ貝かりあり浦かく是をいかと云

八重梅 和名かしハ衣の梅と云

蛤類 梅の花かれぬくるげうるたとのとを公同おまる別種

榛分

吾對類 あつく白きかめ〳〵紅のうつるかるられ

雪崖小螺てもぐ〳〵

雪窟分

蛤類 白く細横よ筋細くえとれ貝よ似て別なり

蟬の羽

蟬須 しかいとのくふさなるべしうすく光ハやわらく

せみの羽をふきさぬくを形ハ畧形でハ歯〳〵

蓋壺 俗称でんがん

異類 石小結くるみ肉なれハ落てもみ

ふくろ形よ穴あり下ハ底のあるもあり又なるさもみを色紅紫

をようをを多さかし

遠干凡分 百貝圖 おぢ壺京ドもも烏帽子貝と云

異類 形ぬぐらぢがよ似くを裏ぶみ色あくたてをを

うくなるをのを多くをを矢拇ふう形よ穴あり

底ハ付きしぬるくををこぐちもを云

松風

蚌類　色白くして横に細くこはるに筋ありて和布浦よりあさ分なり

薄雲

蚌類　かし厚し地白くちらくとかし黒き斑点あり

鶯分　百貝圖に八色を孔雀貝と云

蚌類　石貝の色黒きなるべし

巻貝分　又九貝分と云

螺類　裏ぢらくの白地にて赤かし裏は白き

椎の實

螺類　みどりくにして白きあかきの斑点あり椎の実の

ぶとくしぶべるよりあり拳螺類なり

花笠　是神社にある八重分と同物歟

螺類　角ありてのなりかし横に長くして異形なる分なり

ちぶあくく白くくしとあるなり

玉蕾

蚌類　なをうすく筋ありて白し中分なく小さい稀なり

中蕾分

蛤類　うんちやくのごとし色黒くいろ中分のようなる方

二つ合せるぶとくしぬれうる見なり

枕分　二種あり

螺類　みなし貝の類多く黒くてやわらかなる殼文あり
一種ハ高仙の中まわりし軒類なり
悪鬼介　百貝圖ニ百鬼貝澪貝とも云
螺類　こう多くあり小介なり稀なるものハ色白し殼
黄ばみやうなるもの多くあり刺螺の類なるべし
腰高　百貝圖ニ盲貝と云なり
螺類　うらおみ似て節迄ものこねかゝり落ようなる
かんぐりそこ下品し
鬼業螺　百貝圖ニ夫狗貝と云なり
螺類　角多くあり紀介なり小介より形し下品なり

生蜆　百貝圖ニ玉琲貝とも云
軒類　大小数種あり小さいなし和名より小介を世
合那ふるものゝ多し　ま形人多くあるごとし
是を百二名共中圖圖の形ハ異名のとれ九形
さい是除去バ百二種なり此中ふるく得がたし
このを去て百介の数ふるべし二十六介ハ
世たるなるハ此外集外のものゝ出で次第
追加するもの也

三月之日 住吉浦 潮干圖

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74
ガラス使用

前歌仙今三十六品評

蔦今　左一

拌類　小きなるかし大なるかし多し大小色々紀貫之上乃
演と名付たる色あく横よりふとく筋立堅まる思ひ
あるめりよりも紀今ハ上品　蔦ハ今家よりこのあいあるべし阿州より出る
蔦今よりハ紀今ハ上品なるべし

忘今　右一

拾類　こいめりくさつよ筋細くふくくしかきさ今りよりく
別くしたる思ひ紀ハ小横ものく横よりハ小筋ハ紋ハ思ひさいろくを

梅花今　左二

輪類　白く花やなし横よ細く筋立こ今ハ梅花乃
一辨高くるもとし此今ハ梅ぶこの多し八重梅書梅など
まれるくし此今の大るをれおい浦みし猿今とも

櫻今　右二

拌類　此今ハあよ新せ〳〵おとくあづこ今を櫻今と名付入ら
思くハ梅ハ横今ハ高く赤き今こ舊ハの留よりて梅など

片今　左三

無對類　これとなぶ貝と云こものなりよわかさこのとこぢ
れぶとくなりこるを云是又図類別種なり

石変明　右三

無類 世にまれなるごとしなれども出でうゐきとの稀なり

蕊介 左四

蛤類 蕊のいハ此貝紙ふ入ハ和名抄云ハ紀貝なるべ

有よ云裏紫と云介なり後拾遺よ云紫介ハさくら貝と云

あこ唇ふさくらみて地白くして紫のかたちなる介なるべしてハ

後拾遺の万葉なるべし女性よ云紫貝ハ又貝子の類なれども別物なり

白介 左四

蛤類 此貝紙ふ入いまこの介なり後拾遺よ入る白介ハ

別なりまこの介を後拾遺よ花介と云ハ誤なるべし

蛤介 左五

蜆介 左五

有名なあ介ハあまねく世にまれなるごとし二形あり殼極めて薄

介なれども古歌ふよみ来りて後拾遺の類よ入しなべし

海介 左六

蛤類 いろもとうとく紫なるうち極て小しく大なる

ものなり ごとやもと

蟹介 左六

蛤類 世にまれなるごとふきとのハかし馬刀とまたと新撰万葉集

花介 左七

蛤類 是ハ蟹介と云とのこと花ふいとも云べきとのなり

赤くうとき分なり横ふとき色分と云ふ色を横分よ
ちごへ似人あり図類ふく別種し貝おほ花分とそう
曜麦分 右七 百貝圖に海藻と云

拾類 厚くあらくしくしたやはいらくのやうなるものを
色淡紅ずしなきもの大なるハ色あ小さ程をより
貝分いとうとよくやはき貝し紅分と云人もあり稀分をなで
しこと光しく人もあ後分紀よハ錦分をなでこと云いづ
きろ是なるものを云ふ海分よハ又色をみる錦ともいへどこ
よハ赤のくあ色あて按ハ貝擬ふ入方なでこるべ後分紀ハ浜分べ
空背分 左八 百貝圖に甲貝と云又へなでこと云

螺類 此擬よハ貝べ分を云後分紀よハうづく貝を云和あて
云ものハ又別こと種あいがきろ是なるものを云ふ貝ハ擬よハ
ふ川せ分ハ和あ分ハ玉分と云又吉来方の後よハ貝べく
肉のなきをうつせ分と云ふ一又云ふうまびさ分紀
入ハづ分ふ分こを絵しあし貝光又ハ光螺と云ふものあり
袖分 左八

螺類 此分紀よ入ハ小き分ふく皆くこいきのあるのやうあり
をやうあそで貝こ又一種和あ分ふくこいきのあるものを云ふ
口の方袖ばかく長く出しを云大なるを俗よ稚つき分と云ふ
舟分 左九 百貝圖に猿頭と云

蚌類　此類よりて船分と又和名浦みく云船分とちがひ形狀文よりしかど品も又ちがひしとぞ

蜑分　右九

毛對貝　古き昔和名抄に海ぶ凡と云しものに今い是を和名抄にもあま分と云厚き貝に地黑く白き斑文ありよりて紀分なり

浦打分　左十

螺類　是いかなる一つにして物るとて物るものなりうきまとしハちがひ大きく或ハ小くして形ハ丸く或ハ長くあを白しまくうるとなりうらべのごとく細き節なり

磯分　右十

毛對貝　古き昔の皿にさらなど云俗稱なり

一種いて貝と唱るものハ百貝の中より弁ぐごとし

結貝類　左十一

螺類　世ふ多くまるごとく小きものかし形さまざまとて

又一種ありて俗ハさざいと云なり

千種分　右十一　百貝圖ニハ白黑く彩色もまれ

螺類　下ぞり彩きうるやうふ黑色こく紫とびとなる

色ばかり小分ハくまもなくなり

粕あら分　左十二　百貝圖ニ空蟬貝と云

螺類　色白くしやもされしものハ性やはけもぞ立ゆるハ

丸しつき形なるぐまばさるしぐら

津介 右十二

螺類 地白く殼あり介よりて小くまき子とのすり地白く

褐色殼又かしはの

島介 左十三

蚌類 形ふ香介小回しく色黒し白きよ褐色のすり

あるとふ香と云又多い海よ人男と蛤介と云なり皆

同地白く色のうりあく名うりなし

雀介 右十三

毛蟹類 石よ介左付ひ内なきい砂中よ住り色うと

白さも又赤かさ色よと紀も二種あ又髪白ふて背ひく

さとのを雀と云かるち雀よ似り多くある介なり

都介 左十四

螺類 からよ似りうと赤きの地よこく海あかいがくあ

桜尾螺 右十四

螺類 ぬ多ふ出るう又法螺とを半なり形状世るる

ぶとし小さとのあし

車渠 左十五

蛤類 俗小ちやくし貝とく大なると抄よ用るとの

なり始さいうとく差ふしし世上よ多くたるとし

かくて貝くさも云又海扇とも云多き分なり文蛤貝と手い
大なる偽なり

色分 右十五

蛤類 此撰ム入色分の圖もとかくなでこ分りを
色分ゝと云撰貝の出てなるも色赤きふり色分るも
云あるは舊本の畫乃やゝ形る貝ハもつぶれそくきを
半偽なるべし 按ずなでしこ分り小蛤分を畫きば此
色分ハ丸きもの多でしこ分なるべき歟

破分 左十六

いぼきの分ゝくも破るゝと云なり此撰もろく古あを求び

かやくのやくさいもだきものと云もろ

疵分 右十六

是も疵ある貝を畫べく云ども畫よハ螺の類ゝく出て
なるゝ疵つきもんの出る故圖せり

小分 左十七

もゝ亀くこ海のき分と云り

真蕪防分 右十七

螺類 大なる巻貝のごとし色白し蕪木ふる藻る
やくなるゝ色ハ名付しとる人えもすべて小分も大なる
ハ白きもゝぞ分と云後お仙ゝ入る赤き色分

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74
ガラス使用

是とハ大ヨ別なり

浪間栢分　左十八

蛤類　ふたゝ合しハかしゝ貝とハ深しうらと
莫ヨ光あるとてうすく光なく外形多くあるとの形
或云書よりみまうしいとゝ云ハかきとゝ云
貝なりとなのきどもかきとハ大ヨ別なり

貽分　右十八　百貝圖ニハ蛤貝と云りのよ俗ヨ又別の貽貝あり貽貝黑貝とも云

蚌類　こまいいがいとも声ゆゝく云形ハ和ゆゝく云いがいとハ
別なるハ大ヨ遠へて此別よりる附ハ但州ヨ多紀多のはまと紀
分を云紀志と弁ずし　西行の歌よりる附ハ伊こやと
云歌うゝぶい貝と云べし　實ハ貝あとゝ云ハ中乃高塚を

見うしうゝと云意なるべしさきども真珠ハ石決明より
出ずるものなり貽分ようい出すべし　此すぐるとゝ
謝考不考ならべし和名ゆゝく云い貝ハまきうもきうもく横ヨ
出さ分なり多く白くさきとげあり

右の六く貝合和名とて世ヨ形るものを俗ヨ称と
別ヨ付れくゝ考るの法合せ又ならべし

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74
ガラス使用

後歌仙分三十六種評

前おお仙の撰あり其を雖てゝ後撰人々撰ひ
なをし細かに再さいまと評ぜゝ歌ハ後おお仙乃
序文よりへゝ金書られ詠と人々まで

さゞ波分　左一　　おお仙より同し
ワゝ藤分　右一　　おお仙より同し
梅の花分　左二　　おお仙より同し
花分　右二

おお仙より撰ハ梅分をたゞひとゝ此撰より入ハ梅ところ分と云
ものかり是を花分とゝ云るゆゝ歌のり是圖の俤
かゝ人の赤くいろある分をと云ぶきや
櫻分　左三
蛬類　うすと赤き分なり色てるゝを和おゆく色分と云
みじかく小き櫻分とゝ此撰より合せり
山さくら分　右三
蛬類　みじかき花の蛬ハく櫻よりちし吹分と云りの
小くきなりくゝさかすりあるを和おゆく云此撰乃
圖も是なりおお仙より大よお違せり

いづき須是なるをもちゐ或は淡よりまたは分ち採りを
紫前の色れ濃より出るを真とするし色の濃れたる
余未そしらふ不偽

ふしたん 左四　あま海どろぐさ

いろ分 右四　おなじ海ぐさ

ちよ貝ちよ貝とおぼゆ云ふ色あれ
えめと云なるべし又なでこ分のやしみもん色和あかと云ハ
橫分の橫よ出きを色分と云ひ方是あるべし

からの分 左五　おぼゆ同し

みやこ分 右五　おぼゆ同し

うゝ井分 左六　おぼゆ同し

さたべ 右六　おぼゆ同し

むらさた分 左七

けぶいおぼゆ紀よちぐひさら分の方なるべしさら分の
中前の百貝れ中よ編ど

ちゝ分 右七　おぼゆ同し

なでしこ分 左八　おぼゆ同し

流るのしハ 右八　おぼゆ同し

さぬきこ分 左九

あまこハ和の浦ふくさぐ流と云分なり百分の中よ泛し作る

ほくろ介　右九　百貝圖に塩貝　塩津貝とも

蚌類　大なるハ形しゝ介ようなる白く清やかなる一種和名の浦かくゝとゝいうるゝ介のごとくなる殼の類なりとゝ黒く固色れ紫点阿弓

ふ多介　左十

蚌類　かさちゝれぶくゝ　島介と同類ゆえ多の方ハ白くゝとゝしかさのうゝ多ちゝう多さ介ゆえ

ちゝ免介　右十　おゝ紀ゝ入る

いゝや介　左十一　おゝ紀ゝ同し

あこや介　右十一　おゝ紀ゝ同し

蚌類　おゝ紀ゝ入るゝのと曷おゝ紀ゝ入るゝのと後おゝ紀ゝ入るハ和名かくきんちゝやくゝ介と云ゝとゝのゝ似いづれも見なるゝのをゝゝばわこや介いい介と云ゝるゝ　あゝ論ゝゝるがごとゝ

わこハ阿鬼ゝ半海土の児なゝを云なるべし　介の名ゝよハあゝゝば

あハび介　左十二　おゝ紀ゝ同し

かゝし介　右十二　おゝ紀ゝ同し

うゝせ介　左十三　百貝圖に八代貝ゝ云

螺類　うづゝ介ゝ云ゝとゝの形ゝゝちゝちゝゝゝゝゝゝ

うづゝの生れゝゝくゝかさゝとゝの殼文あゝゝゝゝゝ紀介し

委ハおゝ紀の中ゝ詳に

こなし介　右十三

螺類　上出く下ゐて広くなりて殻の色あいきく
あきども地白く黄赤さくさゞ多し按ずるに
このなを介をよみしゐなるべし後ゑ強て一種の
介れ名とせし歟

あさり介　左十四　百貝圖に白貝と云ことの事也
又高濱貝と云ことの事也

蛤類　えぼうぐり小似くか楕ゑ出し紋ハ浅く有り
紀伊より多く出るえまぐりと同じく瓷通有り用ゆ
えぼうぐりより文いろく面白きえのみ大小ゑ生て

ゑ介　右十四

蛤類　小介ゆく大なるハいまぐりに似て色白く紋ゆし稀ゑ
紋ゆるもあるまかし西ぐこくるやくなる介ゆり多くゑ

拍あく介　左十五　おおぶの仮ゑ同し

かくれ介　右十五

おおぶ仮ゑ云ふ介ゆく同拍紋ゆ甚ハ厚ゆ
えのゑ同じ是ゆ姫まき者

あしくい　左十六

蚌類　和おあくゑいゑすぐきとゑ云介ゆ形のの
形ゑ似くきぐ地ゑ地うゑと黄ゑこいりきの芽れやくなる
文りうゑやゑ介なり小きハかし大なハ多くゑ介ゆり

みおぐり　右十六　おかぜ貝
ほうぐり　左十七　おかぜ貝
ちぐみ　右十七　おかぜ貝
小ぐり　左十八　おかぜ貝
ちくさ　右十八　おかぜ貝

以上後歌仙三十六品の種なり　古歌仙合撰
又は後おかぜの名要し　此撰を用べきなり
前おかぜ　九種　後歌仙　九種　合十八種別
貝あり是ハ名も今を別なり

三十六の内前後とも同名なるもの二十
七種　其の外ども同名異物のもの七種中に
而つまこおかぜ　数よりせば五十二種ハ
同名同物なり
始の今名おかぜ百二十おかぜ五十二種入
百五十四種　おく余ぐ貝人間の貝面ぬ糸
又及をのハ追加ゆ記べし

源氏分配當国録

桐壺　月分
空蟬　女名　又せみ分とも云
若紫　うら分　或ちごめ分
紅葉賀　とうけち分　一名かくし分
葵　女名
花散里　かとぎた
明石　ほとれ分
蓬生　ゆぢつぐ
篝火　わ分
夕顔　ゆふ分
末摘花　ぼに分　一名すゑつむ
花宴　はなぐり分
榊　たこゆふ
須磨　すまつぼ分
澪標　ちの川
関屋　せきや

絵合　たかむさ
薄雲　女名
乙女　めくハしや
初音　うぐひす分
雲　女名
篝火　色分
行幸　山吹分
藤袴　ふぢ分
梅枝　うぐひす分
若菜上　うぐ分
若菜下　甲分
松風　女名
朝顔　女名
玉鬘　女名
胡蝶　蝶分
螢　女名　又錦分
野分　むし分
蘭　女名
梅枝　紅梅分
若菜上　ひめちぐれ
柏木　つるめ分

撰笛　たけのこ介
夕顔　牛角介
幻　させらる介
竹川　玉貝
橋姫　ゑつぐち
絵角　かくち
宮木　うす貝介
浮舟　舟介
手習　きさ貝介

以上五十四種　此中に新撰六歌仙の中より評判の面貝の中より十七種を抜

玲瓏　まれひ介
帝法　本面介
白宮　せきさる
紅梅　ゐに舟介
椎本　ちのせと介
子蔵　まつぶう石蛇
東屋　ふりや介
蜻蛉　うんぢ介
夏深掛　ぶだう介

新撰六歌仙介

前書の中まて介あまの川面介のおとも又えび
おそろくいかのあまぐ神介船介磯介鳥介四種は
川ふくろうあ貝ふれ介きど介はまぐり海ほうき貝ぐ
あまを除川面れ能かれ人ゑ四種は世こ介こる介の
二つ古歌の色ハ合てと云面の歌とおりに今左に記

左一　蟬介　　漢人不知

夫木集
蟬介の鳴とときけば村松の葉ふり沼の雷形ふり

右一　みる介　　漢人不知

夫木集
打ふるうるひみてよさの海はたびの浦は波も面ねべし

特7
3
74

左二　袖　今

清あしゝ衣乃浦の袖ぐい袖ちかひる風のたゝゝとくれる　西行

右二　鳥　今

山家集
波よりもるゝゝの濱ゝかゝすゝい拾ひやもてもあるる船　西行

左三　船　今

夫本集
さゝ人もあぎさふよする船いい見る風やはるゝなる

右三　磯　今

人丸

月
あ夜の玉よ海ゞ迄るい磯ゞいのかゝ変のそゝ〻ふて

貝盡浦之錦上終

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74
ガラス使用

特7
74

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『貝尽浦の錦 2巻』 請求記号 特7-74

ガラス使用